

シモーヌ・ヴェイユにおける「注意」

—「神への暗黙裡の愛の諸形態」を中心にして—

榎 本 百合子

アメリカ出発前にペラン神父のもとに残された、『神を待ちのぞむ』所収の「神への暗黙裡の愛の諸形態⁽¹⁾」は、シモーヌ・ヴェイユの諸論稿中最もまとまった形で、彼女の言う «*ἐν ὑπομονῇ*» の状態での種々の形態を論述している。そこでは、「神を待ちのぞむ」ことの中核をなしているものは「注意」(attention)であることが、指示されている。このことは、必ずしも前面に出して述べられているわけではないし、「注意」への明瞭な言及の殆どない部分もあるけれど、神への暗黙裡の愛の諸形態がいかなるものであるのかそれぞれに追究することによって明らかとなる。また、ヴェイユにとって「注意」がもつ意味も考察したい。

(一)

ヴェイユは、神の訪れより先に、現存してもいないし現存したこともない神を愛の対象にはできないしすべきではない、と主張する。これは、「靈的自叙伝」と題されたペラン神父への第四の手紙や『超自然的認識』の序言に収められた断片などに記されている彼女自身の神の訪れの経験に深く裏打ちされた態度である、と言えよう。しかし、神の訪れに先んじてそれを受ける準備をなす愛がある、とヴェイユは考える。それは、神への間接的な愛換言すれば暗黙裡の愛である。

神への暗黙裡の愛は、神が秘かにしかし現実に現存するこの世界で三つの対象に関わって、三種類の愛を形成する。それら三種類の愛とは隣人愛と世界の秩序への愛と宗教的勤めへの愛である。神への直接的な愛、ヴェイユの言い方に従えば「明白な愛」(amour explicite)が生じた時、これらの愛は消滅するのではなくかえって一層強くなり、全体として一つの愛を形成するようになる。他方、恩寵である神の訪れを得ることなく、神への間接的な愛の形態に留まる人々も多い、とヴェイユは述べる。けれど、間接的な愛が高い純度と強度に達しうることとその有意義性とを彼

女は承認している。

神への暗黙裡の愛として挙げられた三つのもののうち、ヴェイユはまず隣人愛から論じ始める。彼女によれば、隣人愛とは正義に他ならない。彼女の精神的支柱である福音書においてもギリシア文化においても、隣人愛と正義との間には何ら区別はない、とされる。

ヴェイユは隣人愛である正義を追究する前に、不正について論考する。正義は、二人の人間が平等な力関係にあつてどちらも他方に強制する力を持たない時には、自然に検討され追求される。なぜなら、相互の同意 (consentement mutuel) を本質とする正義、天秤のイメージで表される正義だけが二つの意志を一致させうるからである。それに対して、両者が不平等な力関係にあつて強者と弱者とが存在する時には、二つの意志が一致する必要はなく、強者の意志が弱者に強制される。これが、不正である。不正は、機械的な必然性であり魂の自然的な動きである「重力」(pesanteur) に由っている。不平等な力関係において弱者は服従させられ人格を奪われ物質同様になってしまう。このような不正を、ヴェイユはトゥーキューディデースの記述するアテーナイとメーロスとの在り方で例示する。強者であるアテーナイは、敵対するスパルタと同盟関係にありその時は中立であった弱小のメーロスに味方になるよう強いる最後通牒を送り、不平等な関係における必然性について次のように述べる。アテーナイの最後通牒は正しいものではない、しかし、正義は両者に同等の必然性がある場合にのみ検討される、もし強者と弱者とがあれば、可能なことが強者によって強制され、弱者によって受容されるだけだ、なぜなら、「常に、自然の必然性によって、誰もがその力がある所ではどこでも命令する」(AD 127)⁽¹⁾から。結末は、メーロスが服従しようとしなかったのでアテーナイはメーロスの男達は殺し女子供は奴隷として売るといったものだった。不平等な関係における力の役割について詳述しているのは「『イーリアス』力の詩」である。ヴェイユは、トロイア戦争に題材をとったこの作品に関してその主題は力である、と考える。力は極限にまで働く時、その力に服従する人間を物にしてしまう。その時人間は生存し魂を持ってはいるけれど、人格を失った物になっている。ところが魂は本来物に宿るようにはできていないので、力が物にした人間は内面生活を失うことになる。「人は奴隷が失う以上には失えない。奴隷はどんな内面生活をも失う。運命を変える可能性が現れる時のみ奴隷は幾分かの内面生活を再び見出す。これが力の支配力である⁽²⁾」それ故

ヴェイユは「奴隷となる日に人は魂の半分を失う」(AD128)と言う。同趣旨のことは随所に述べられているが、例えば『ノート』では「その都市を破壊されて奴隷として連れて行かれる人々には過去も未来もなかった、いかなる対象によって彼らは自分達の思考を満たしえたであろうか⁽³⁾」と書いている。奴隷はただ自己の生存を守るためにのみ努力するよう追い込まれる。奴隷状態とは「同時に、肉体的苦痛であり魂の苦悩であり社会的転落である」(AD120)不幸、ヴェイユの基本問題の一つである不幸の典型である。しかしながらヴェイユは、アテーナイ人の不正に関する明晰な理解を、集団の精神しか持たず強者が弱者よりも正しいと信じていると彼女が判断するローマ人やヘブライ人の知的暗愚よりもはるかに高く評価する。ローマとヘブライとはヴェイユにとって常に負の価値しかないのに対し、ギリシアは正に「前キリスト教的直観」を含んだ「泉」である。アテーナイ人の知的明晰さはヴェイユによれば隣人愛のごく近い所にあるものであり、この認識は、ギリシアの精神にキリスト教と同質の天啓の先駆けを発見する彼女の見方につながっている。

では、超自然的徳である正義はいかなるものであるのか。それは、不平等な力関係にいる強者においては、あたかも平等な力関係にあるかのように弱者に対して行動することである。そのように行動する強者は、弱者から奪われていた人間の身分を弱者に与える。このことは被造物に対する創造主の寛大さの再生であり、「同情」(compassion)である。他方、強者によって同等関係にあるかの如くに扱われ人格を持つ人間として見られる弱者における正義は、強者により人格として取扱われるのが力の同等関係によるのではなく、相手の寛大さによるのであることを認めることに存する。このことが「感謝」(reconnaissance)である。弱者における感謝はそれが純粹であるなら「同情」の徳への参与である。というのは、強者における正義を行いうる者だけがその正義を認めるからである。強者における正義即ち「同情」を認めないで「同情」の結果だけを受ける者は「同情」の正義を行えない。奴隷に代表されるような不幸の内でも不正に扱われている人間にとっての正義は、その扱いが正義とは異なっているけれどそれは人間本性の必然性に合致していることを理解することにある。その時弱者は屈従することもなく反逆することもなく自分の真空状態即ち自分の不幸を見続けなければならない。このような時不幸という真空の割れ目から神の恩寵が入って来る可能性があり、その恩寵を得るためには常に注意し目覚めていなければならない。そのような人間こそが、今度は不幸な者に対して隣

人愛を行いうる。超自然的隣人愛は、「その一方は人格を備え他方は人格を奪われた両者の間に稲妻のように起こる、同情と感謝の念との交換である」(AD133)。

ヴェイユによれば、このような正義の徳は特にキリスト教的な徳である。なぜならその徳は、全能ではあるけれど地上では秘かにしか存在しないキリスト教的な神概念に基づいているからである。彼女は創造を、神の自己拡張ではなく放棄であり退去であると考えた。神は不在という形でこの創造された世界に存在する。それ故、この世界における悪の存在は神の实在性への反証ではなく、かえって神の实在の眞実性を啓示する。創造の結果、神と全被造物とは神のみよりも小さくなっている。愛である神は創造という愛の愚かによってすすんでこの縮小を受け入れた。神は自己の存在の一部を無としそのことで自己の神性を無とした。創造による神自身の否定は、人間が神のために自分を否定する可能性を神が人に付与するためにある。人間はその可能性に対し同意することもしないこともできる。しかしはっきりしていることは「拒絶するかしないかは我々にかかっているこの応答、このこだまが、創造行為という愛の愚かに唯一可能な正当証明である」(AD132)ということである。そして自分を否定することへの同意が同情なのである。

不幸によって無力で受動的な物の状態に陥っている弱者に人格を取戻させる同情の根本は、注意である。ヴェイユはルカ伝第10章30節から37節のイエスの話題を想起させる例をあげて注意の働きを説明する。生気もなく血にまみれて溝の傍にあるむきだしの肉体は名もなく誰も知らない。誰も彼に気付かないし、気付いてもすぐに忘れてしまう。しかし、「ただ一人が立ち止まりそれに注意する」(AD133)。この注意から、超自然的隣人愛、人格を備えた者と人格を奪われた者との間に交される同情と感謝との交換は始まる。「この注意は創造的である。」(AD133)なぜなら人格としては存在しない物になっている人間に、この注意は人格としての存在を与えるからである。また、注意は放棄である。「注意は作用している時、放棄である。少なくともそれが純粹であれば。」(AD133)注意が働いている時、人は己れのを拡大させるのではなく、自分とは別の独立した人格を存在させるために縮小を受け入れている。不幸によって自由な同意の能力を奪われ物質状態に陥っている弱者に人格の存在を望み自由な同意の能力を回復させようと望むことは、注意に基づく同情によってその弱者の内に身を移すことであり、更には、自分自身を不幸に同意させること即ち自分自身の破壊に同意することである。このように自己を否定

する時、人は神に倣って創造的肯定によって他者を肯定できるようになる。他方、強者に対する弱者の共感が、弱者に強者の内に身を移し想像上の力を獲得させるので自然的であるのに対して、弱者に対する超自然的同情を対象とする弱者の純粋な感謝は超自然的である。「純粋な同情と同様純粋な感謝の念も本質的に不幸への同意である。運命の相違が彼らの間に無限の距離を置く不幸な者と彼に恩恵を施す者とは、この同意の内でも一つになる。」(AD135) 同情と感謝とは不幸への同意に他ならないが、ヴェイユによればこのような隣人愛を成立させる注意は、超自然的である。

隣人愛は創造的注意から成っている。創造的注意とは存在しないものに現実に注意をすることである。さて、存在しないものを現実に考える能力を持っているのは神だけである。創造において神は、存在していなかったものを考えそのことにより存在していなかったものを存在させた。現実には人間は存在していないのに神が人間の存在を考えることに同意することによってのみ、現在人間は存在している。それ故、不幸な人に人格を認め人間を考えさせるのは、創造的注意をなして恩恵を施す者の内に居る神である。「我々の内に現存する神だけが不幸な人々における人間性を考え、物体に注ぐ視線とは別の視線で不幸な人々を真に注視し、人間の言葉を聞くように彼らの声を真に傾聴することができる。」(AD137)

隣人愛は神から人間へ降下する愛である。この愛は人間から神へと上昇する愛に先立っている。神が人間を探し求めるというヴェイユの思想は『前キリスト教的直観』所収の「神の降臨」において集中的に展開されている。デーメーター讃歌、スコットランドの「ノルウェー公」民話、ヴェイユが各所でとりあげるソポクレス作『ユークトラ』による彼女とオレステースとの再会、に彼女独得の枠組による解釈が加えられる。神の降臨において神は人間を探し求め、訪ねられた魂が神を認識し神に同意することによって初めて神と魂との合一が行われている、と彼女は解する。それ故ヴェイユは「神への暗黙裡の愛の諸形態」において次のように続ける。神は同意に準備された魂に急いで臨み、その魂を通じて不幸な人々を見聞かしようとする、その時魂は神の現存を知らず、時が経っても神を認識しないままかもしれない、しかし、不幸な人々が注意によって彼ら自身のために愛されるところにはどこでも神が現存している、また、自分達に同情をもつ人に感謝をする不幸な人々にも神が現存している、と。そこで結論は次のようになる。「真の愛にお

いては、我々が神において不幸な人々を愛するのではなく、我々の内の神こそが不幸な人々を愛する。我々が不幸にある時、我々の内の神こそが我々に好意を寄せる人々を愛する。同情と感謝の念とは神から降下する、そしてそれらが視線において交換される時、神は視線が会う所に現存する。」(AD 138) 不幸な者と彼に恩恵を施す者とは神から発し神を通して愛しあうのであって、神のために愛しあうのではない。彼らは互いの愛のために愛しあう。そのことは人間には不可能であり、神によつてのみ行われる。

力と超自然的愛と正義との関係について同趣旨のことをヴェイユは、プラトンの『饗宴』に関する論述中の「悲劇詩人アガトンの演説」においても、「エロス」に関連させて述べている。(特に『前キリスト教的直観⁽⁴⁾』の54ページ31行目から55ページ9行目までを参照。)しかしヴェイユは先に述べた恩恵の場合の他に、不幸な人々への隣人愛の形として罰の場合を考える。ヴェイユによれば、力は善および悪をなす能力であり、非常に不平等な力関係においては、強者は弱者に正しく善をなしてでも正しく悪をなしてでも弱者に関して正しくありうる。そこで、罰における正義としての隣人愛は次のように規定される。「正義は恵みにおけると同様に罰においても定義される。正義は、物としてではなく人間として不幸な人に注意を払うこと、不幸な人に自由な同意の能力が保持されることを望むこと、に存する。」(AD 141) 大切なことは、罰の程度ではない。大切なことは罰が法律に由っていて合法的であること、そしてその法律が神的性格を持つものと認められることだ、とヴェイユは述べる。罰は宗教的性格を有し秘蹟に似た浄化の働きを担わなければならない。それ故、刑事裁判組織において、司法官など罰を下す側の強者は自分の意のままになる人間に対して注意と尊敬とを向けるべきであるし、弱者である被告は課せられる罰に対して同意するべきである。罰を与える場合の正義に関する強者の立場について、ヴェイユの説明は必ずしもこの論旨において十分とは言い難い。しかし我々は罰を下す側の姿勢に、必然性の内に生きる人間としての服従、義務ゆえの力の行使を考慮する⁽⁵⁾ことによつて、罰に認められている隣人愛を理解することができるものと思われる。

ヴェイユは、神への暗黙裡の愛の諸形態のうちの隣人愛から、友情を区別して扱っている。友情は厳密には隣人愛と異なっている、なぜなら、隣人愛がすべての人に対して働きうるものであり特定の対象は同情と感謝との交換を起こりうような不

幸という機会によるのに対し、友情は特に一人の人間を他の人間よりも好み選択するものであり、隣人愛と同様に神の愛の予感を蔵しているながら「純粹であって人格的、人間的な愛」(AD198)だからである。隣人愛、世界の秩序への愛、宗教的勤めへの愛は、非人格的愛として特徴付けられる。神への愛は、神との直接の人格的接触がない限り非人格的であらねばならない。それ以前の神への人格的愛は想像上の愛であり非現実の愛である。神との直接的な人格的接触を得た後の神への愛は、人格的であると同時により高い意味で非人格的な愛になる。なぜなら、新たな光の下で隣人愛、世界の美への愛、宗教的勤めへの愛が行われるからである。非人格性でまとめられるこれら三者から人格性によって区別される友情は、対立するものの超自然的統一、即ち必然性と自由との統一と定義されている。二人の人間の必然性を含んだ関係において同等性が望まれ両者の自由な同意の能力が保持されることが望まれる時、人間の自律性の尊重という超自然的な徳が行われている。それは神がそれぞれの者に現存していることによって初めて可能になる。ところで「自分自身と他者における自律性の保持への同意は本質的に不遍的なものである」(AD205)。そこで自律性の保持はすべての人々に対して望まれることになり、友情は人格性という特徴をもちながらも隣人愛の方向へ強く引かれることになる。ヴェイユの人格性・非人格性の問題は興味深いものである⁽⁶⁾けれど、ここではヴェイユが人格性によって友情を隣人愛の言わば一特殊形態として扱って隣人愛から区別していることのみを指摘するに留めたい。

(二)

「神への暗黙裡の愛の諸形態」において第二に挙げられている「世界の秩序への愛」の項で、我々は「注意」の語がただ一度軽く触れられているのを見出すことができるにすぎない⁽¹⁾。しかし、「世界の秩序への愛」もやはり「注意」を基にしていることが、他の論文をも参考にすることで明らかとなろう。

ヴェイユはまず、世界の秩序に対する愛、「愛される世界の秩序」(AD161)である世界の美に対する愛は隣人愛を補うものだ、と始める。この愛も隣人愛と同様に、創造における神の放棄に倣うことから生ずる。全能である神はこの世界を創造し存在させる際、この世界で命令する力があるのに命令しないことに同意している。神自身の代わりに、魂の靈的な質料をも含んだ質料に結びついた機械的必然性

に、また一方では思考する人間に本質的な自律性に、支配するまかにさせている。さて、人は隣人愛によって人類を創造した神の愛をまねる。隣人愛において人は、神が存在しない人間を考えることによって人間を存在させたように、人格としてではなく物として存在している不幸な人に注意を向けることによって人格を与え人間として存在させるからである。他方、世界の秩序への愛によって、人間がその一部をなしているこの世界を創造した神の愛をまねる。世界の秩序への愛において人は、神が全能であるのにこの世界に力を及ぼさず実は宇宙の中心でありながら宇宙の外にあるように、自分が命令できるのだという想像、世界の中心にいるのだという想像を放棄するからである。

世界の秩序への愛に関して述べるならば、世界の秩序への愛は想像力の放棄に始まる。この想像力の働きの停止された所に「注意」に基づく「読み」(lecture)の深化があり、必然性に支配される世界の秩序の認識ひいては世界の美への開眼がある。神の創造において宇宙は必然性に委ねられており、人間には本来物質や魂に命令する力はない。しかし神は人間にこの力の想像上の似姿、想像上の神性を与えた。それは、被造物である人間が神に倣って自分の神性を放棄することができるために、である。人は各自、世界の中心に位置していると想像している。想像力の働きによって人間のうちには、空間に関する誤った感覚ばかりでなく更に、誤った時間感覚、価値体系、存在感情が形成される。しかし想像力によるそれらは非現実でしかない。不幸に代表されるような人間に避け難い「真空」(vide)を埋める想像力が、現実を排し幻想による非現実を構成する。このことは『ノート』の中で繰り返し述べられている。「真空を埋める想像力は本質的に偽りである。それは三次元を排除する、なぜならただ現実の物だけが三次元の内にあるからである。それは多様な関係を排除する⁽²⁾」世界の中心に位置しているという想像をまず放棄しなければならない。想像力の放棄は現実に見定め永遠に見定める端緒である。そのことはより深い「読み」の獲得になる。「読み」とはヴェイユにおいて、人が人間や事物や出来事について下す評価・判断であるが、「読み」は一般に、この世界を支配している「重力」、具体的には社会的通念や情念である「重力」に則って行われる。「読みは—ある種のすぐれた注意がなければ—重力に従う⁽³⁾」世界はいくつかの意味を有するテキスト、いくつかの「読み」が可能なテキストである。人はまず感覚を通して自分の意に合う自分が中心となった「読み」を行う。しかし、「読み」には段

階があり、人には複数の「読み」が可能であり、「注意」によって「読み」は深くなる。この「注意」が人に世界の必然性を示し、更に必然性の支配する世界に不在という形で存在する神を示す。「感覚の後に必然性を読み、必然性の後に秩序を読み、秩序の後に神を読むこと⁽⁴⁾」世界は神が不在であるものとして神自身である。神は不在という形でしか宇宙に現存できない。しかし、必然性の支配下にある世界は、神の愛の愚かである創造に由るものとして、善に他ならない。そして全体として必然性であり善である世界は、美に他ならない。

注意に基づく「読み」によって、想像力の結果である非現実を破り、現実と直面しなければならない。そして、世界の現実である必然性に同意することは、不幸の可能性への同意であり、神の愛の愚かに対応する人間の愛の愚かなのである。「己れの偽りの神性を除くこと、自分自身を否定すること、世界の中心であると想像することを放棄すること、世界のすべての点と同じ資格で中心であり真の中心は世界の外にあると認めること、それは、物質においては機械的必然性が支配し各魂の中心では自由な選択が支配していることに同意することである。この同意が愛である。この愛の、思考する人間に向けられた面が隣人愛であり、物質に向けられた面が世界の秩序への愛、あるいは同じことであるが世界の美への愛である。」(AD148-9)

世界の秩序への愛、それは、神がこの世界で取っている姿である必然性への服従に他ならない。以下『ノート』によるならば、ヴェイユは服従に二種類のものを認める。一つは「重力」に対する服従、もう一つは現実である物の関係に対する服従である。重力は時には善や神など真実らしい表面を装うことがあるが、それでも重力に従う時人は真空を埋める想像力に導かれている。しかしながら、幻想という補償を生み出す想像力の働きを停止し注意を物の関係に向けると、必然性が現れて人はそれに服従せずにはいられない。その時、必然性の観念と服従の感情とが得られる。服従は最高の徳であり、服従において必然性は愛されている。必然性は個人に関しては拘束であり力であり、要するに「重力」と呼ばれる低いものである。だが、宇宙全体の必然性はそこから魂を解放する。神は全宇宙を盲目的な機構である必然性に委ねたが、それは言はば神の服従である。必然性は神を覆い隠している。善である神が愛の愚かによって創造した被造物の必然性は、善から隔たっている。世界の秩序における善の欠如・神の不在こそ完全な愛の最高の証である。背後に創造者の愛がある故に、善と異なった純粋な必然性が、美しいのである。「神への暗黙裡の愛の諸

形態」の表現に従えば次の通りである。「我々は心象において、その存在自体が我々の注意の行為にかかっている心象において、宇宙の実体そのものである必然性、しかし必然性としてはまれにしか現れない必然性を熟視しうる。人は何らかの愛なしに熟視することはない。世界の秩序のこの心象を熟視することは世界の美とのある接触である。世界の美とは愛される世界の秩序である。」(AD160-1)

世界の美は一般に、神と触れる最も自然で容易な道だとヴェイユは考える。神は同意へと向けられた魂に、その魂を通して不幸な者を受するために急いで降臨するのと同様に、魂を通して神自身が創造した世界の美を受するために急いで降臨する。他方、コレーの神話に見られるように、魂が美を受する自然な傾向は神への愛に魂を解き放つ神の策である。世界の美は物質そのものの属性ではなく、世界と、人間の肉体と魂との構造に基づく感受性との関係である。世界の美への愛は魂に降臨した神から発し、宇宙に現存する神へと向かう。神以外にはただ宇宙全体だけが真に美である。宇宙の中で宇宙より小さいものは、間接的に美に関わっているもの、美の模倣であるものとして、美であるにすぎない。芸術は一定の素材の中に宇宙全体の美を映し出そうとする試みであり、一級の芸術家は世界の美と直接に接触しており、一級の芸術作品は神の靈感を受けている。

この世では美だけが唯一の合目的性である。なぜなら、この世に目的となるものは何もないのに、カントが述べたように、美は目的を含まない合目的性だからである。美だけは他のもの手段ではない。美だけがそれ自体でよいものであるが、何も利益は与えない。美はそれ自身しか与えない。(ただし美はこの世界で唯一の合目的性であるからすべての人間の追求に現れる。)宇宙は目的や善となりうるものを含んでいない。宇宙は宇宙の美以外には何ら合目的性を含んでいない。美以外の合目的性の欠如とは、必然性の支配である。しかし、魂が愛に導かれているならば、目的のない必然性を熟視すればするほど魂は世界の美に近づいてゆく。ヨブの経験したように、必然性のもとでの苦悩に誠実であり偽りの慰めを求めない時、その不幸な者に神は世界の美を示すために降臨する。

合目的性の欠如、意図の欠如は世界の美の本質である。世界の美に倣い合目的性や意図の欠如に対して自分の意志を放棄することが、完全な服従であり、人格を放棄することである。この服従と放棄とは宇宙を創造した神の服従と放棄とを模範にしている。人格の放棄によってこそ人間は神の似像である。それ故、自己放棄の準

備が十分出来ている人を除いては、人を不幸によって物質の状態に落とすのは彼から人格放棄の可能性を奪うことになるので、服従を行う人々は他の人々の人格を尊重する。「神が我々の自律性を、我々が愛によってそれを放棄する可能性を持つために創造したように、同じ理由で我々は同胞における自律性の保存を望まねばならない。」(AD173)

世界の美への愛と隣人愛とは対立しない。「世界の美への愛と同情との間に矛盾はない。世界の美への愛があっても、不幸な時自分自身のために苦しむことに変わりはない。その愛があるからといって、他の人々が不幸である故に苦しむことに変わりはない。その愛は苦しみとは別の次元にある。」(AD173)かくてヴェイユが「世界の秩序への愛」の冒頭に述べた「隣人愛を補うもの」としてこの世界の美への愛が結論として提出される。

(三)

ヴェイユは神への暗黙裡の愛の第三のものとして宗教的勤めへの愛を挙げる。

既成宗教における神への愛は、神の名が用いられていても神への明白な愛ではなく暗黙裡の愛である、とヴェイユは言う。なぜならその愛は神との直接的接触を含んでいないからである。しかし、宗教的勤めには、それが純粹である時には隣人愛や世界の美におけると同様、神が現存している。

ヴェイユは、既成宗教への愛が自分の生まれ育ち生活する国や環境にまづ左右されると述べている。それは言語の場合に似ている。「魂にとっての宗教の変更は、作家にとっての言語の変更と同様である。」(AD177)これは『根をもつこと』に力説されている、歴史を持った環境を重視する思想につながっている。ヴェイユがしばしば不幸の典型としてあげる奴隷は自己本来の環境である都市を破壊された者であることも想起されるべきであろう。しかしながら一方で、環境に規定された一宗教への愛こそが他の諸宗教への真の尊重を生じさせるのだ、とヴェイユは考える。それはシンクレティズムとも批判される姿勢、様々の相異なる諸宗教間の共通性と真理の一性とを認める彼女の姿勢に基づくものと言えよう。

ヴェイユは宗教的勤めのうち、祈りを、とりわけ主の名を称えることを中心に据える。『ウパニシャッド』や『バガヴァッド・ギーター』の一部試訳を『ノート』に収めているように東洋思想にも関心を寄せていた彼女は、仏教における称名念仏

に例をとって宗教的勤めの本質を次のように把握している。「宗教的勤めの効力は、主の名を称えることに関する仏教の伝統によれば全体として理解されうる。仏は、仏によって救われたいとの願いをもって仏の名を称える人々をすべて、〈純粹の国〉にいる仏のもとにまで引き上げると誓った、と言われる。この誓いの故に、主の名を称えることには現実に魂を変える力がある、と言われる。」(AD 176)ヴェイユは、宗教とはこのような神の約束に他ならないとしている。いかなる宗教的勤めも主の名を称える一形式なのであり、宗教的勤めの効力は、救われたいとの願いをもって宗教的勤めに専念する人を救うことに存する。この宗教的勤めをなさせるものは、不幸な者への同情や世界の美への開眼と同様「注意」である。「宗教的勤めは完全に、願望によって活気づけられた注意から成っている。」(AD 194)

では宗教的勤めのもつこの効力はいかなるものであるのか。それは、完全な純粹性との接触が悪の破壊に効果を有することにある。ヴェイユにおいて純粹性の概念は重要であるが、彼女によれば完全な純粹性だけが汚されない。魂が悪に汚されている時完全に純粹なものに注意を向けて悪の一部が純粹なものに移されても、純粹なものは変質させられず、悪を返送することもない。それ故純粹なものに集中された注意は各瞬間に悪を破壊している。さて、神に創造された世界の美はこの世で完全に純粹なものである。しかし世界の美は、ヴェイユによれば、完徳に向かつて大いに進んだ人しか感覚することができないし、「ある意味で感覚できるものであるけれど、感覚できるものの中に含まれてはいない」(AD 181)。ところが宗教的なものはこの世界に存在する感覚できる個物でありながら完全に純粹である。それが純粹であるのは、神の約束による。「宗教的なものがそれによって純粹である約定は神自身によって批准されている。」(AD 181-2)それ故にそれは有効な約束であり、宗教的なものの純粹性は無条件で完全であり同時に現実のものである、とヴェイユは主張する。更に、それは事実上の真理であって証明されえないものであり、ただ経験によって検証されうるだけだ、と述べている。この真理の経験による検証という立場は、「靈的自叙伝」に記されているヴェイユによるソレムの修道院や葡萄園などでの経験⁽¹⁾によって裏打ちされたものであろう。「完全な純粹性に視線を注ぐことを学んだ時、人生の限られた長さだけが、裏切りがなければこの世からも完徳に達するだろうと確信することを妨げる。というのは我々は有限な存在であり、我々の内の悪もまた有限である。我々の目に示される純粹性は無限である。我

々が純粋性に視線を注ぐ度毎にたとえ僅かにでも悪を破壊するならば、時間の制限がなければ、その働きをかなりしばしば繰り返すことでいつの日かすべての悪が破壊されることは確かであろう。」(AD188)純粋性に注意が向けられようとする時、魂の凡庸な自然的部分は反抗しようとするけれど、魂は純粋性への注意に同意しないではいられなくなる。「魂がそれによって救われる努力」(AD189)は「注意と同意との行為」(AD189)であり、救いをもたらす態度は待つこと、いつまでも続きいかなる衝撃にも動揺しない注意深い忠実な不動性である。ヴェイユは待つことの例として、ルカ伝中の召使によるものと思われる、主人にすぐ戸を開けられるよう戸の傍らで耳を傾けている奴隷を挙げている。いかなる状況においても注意深く不動であらねばならない。積極的な救いの探求はかえって害になる。

その純粋性が注意を払う人の悪を滅す宗教的勤めのうち、先に述べたように、ヴェイユは祈りを最も中心的なものとしている。祈りと注意とはしばしば結びつけられて言及されている。例えば、「注意は、その最高の段階では、祈りと同じものである⁽²⁾」「完全な注意とは祈り以外の何ものでもない⁽³⁾」祈りに際してヴェイユの経験したものは、先に触れた「霊的自叙伝」の部分に最もよく説明されている。ソレムの修道院で知己となったイギリス人を通じてイギリスの形而上的詩の存在を知ったヴェイユは、その後暗記したイギリスの「愛」という詩を持病の頭痛に際してすべての注意を傾けて暗誦していたところ、その暗誦は「祈りの効力」(AD44)を持ちこの暗誦のある時に「キリスト自身が降臨し」(AD45)彼女を捕えた。また、マルセイユ出発の前年ティボンと「主の祈り」をギリシア語で暗誦する約束をしたことを契機にヴェイユはやがて「毎朝一度絶対の注意をもって主の祈りを暗誦することを唯一の勤めとして」(AD48)自分に課した。その勤めの効力は非常なもので、時に最初の数語で空間外の所へ連れ去られ特別の感覚の対象となるような沈黙に満ちた無限の中になるようになる。「また時には、主の祈りの暗誦中や他の時にキリスト自らが現存します」(AD49)とヴェイユは彼女の期待以上の注意の効力を書き綴っている。宗教的勤めへの愛は祈りにおいて最も尖鋭な形をとる。神秘家の著作を以前に読んだこともなくこの世での神と人間との間の現実の人格的接触が可能であるとは考えてもいなかったヴェイユは、予期しなかったその接触によって、その接触が自分の作りあげたものではないことを確認すると同時に、宗教的勤めへの愛の持つ意味を彼女なりに確立しえたのである。

(四)

隣人愛であり世界の美への愛であり宗教的勤めへの愛である神への暗黙裡の愛においてその本質をなすものは「注意」である。隣人愛に関して言えば、不平等な力関係において上位にある者と下位にある不幸な者との間の同情と感謝との交換は、力を持つ者が物質とされてしまっている不幸な者に対して注ぐ注意が根源になっている。その時不幸な者は人格を取戻し、上位者が自分に向けた同情に感謝するのである。同情も感謝も不幸への同意とヴェイユは指摘している。次に、必然性の支配するこの世界において人は魂の重力に導かれ現実を見ることを妨げられ、想像力の働きにより非現実の中に生きている。けれど想像力の働きを停止して純粋な注意を物に向けると、この世における神の現存に他ならない神の不在である世界全体の必然性・重力の体系そのものが姿を現す。その時人は、ヴェイユの好んだストア派の言葉に従えば「運命愛」(amor fati)によって世界の秩序に服従し同意する。そこに「愛される世界の秩序」である「世界の美」への愛が生ずる。更に、注意をこめて行われる宗教的勤めについて言えば、宗教的なものの純粋性が注意を行う人の魂の悪を破壊し、時には神との直接的接触を可能にする。神の名を称えることをヴェイユがその中心に据える祈りこそ宗教的勤めの核であるが、宗教的勤めは神による救いの約束によって完全に純粋である。救いへの魂による努力は、注意であり、神の降臨の際の同意なのである。

さて、神への明白な愛を得るようになる以前に神への暗黙裡の愛をもち続けることこそ、ヴェイユが *patientia* というラテン語訳では不十分だとしている *ύπομονή* 即ち待つこと (*attente*) に他ならない。(AD 54, 193 参照。) それ故、「神への暗黙裡の愛」が「注意」を基盤にしているならば、「神を待ちのぞむ」とはこの世のものならぬ善に「注意」を向け続けることに他ならない。この「注意」は本質的にこの世の善に結びついていない故に「真空への注意」(*attention à vide*) であらざるを得ない。そのように注意を働かせていることは、この世の人間の魂を求めている神が訪れた時目覚めており同意することへの準備である。それ故、「注意は神に至らせる魂の唯一の能力である⁽¹⁾」し、ジャネイラに従えば「注意は単なる方法ではなく徳である⁽²⁾」。ところでジャネイラは「自然時」(*moment naturel*) と「超自然時」(*moment surnaturel*) との間の「中間時」(*moment intermédiaire*) を注意の時と

して把握している。確かに神を待ちのぞむ時期において注意は決定的に重要な役割を果たす。しかし、「神への愛によってこの世での純粋な愛を失った人々は神の偽りの友である」(AD214)と記し、「隣人、友人、宗教的儀式、世界の美は、神と魂との直接的接触の後に非現実的なものの列に陥ることはない。逆に、ただその時にこそ、それらのものは現実的になる。以前にはそれは半ば夢であった。以前にはいかなる現実もなかった。」(AD214)と「神への暗黙裡の愛の諸形態」を結ぶヴェイユにおいて、注意は単に「中間時」におけるものではなく「超自然時」において新たな光のもとでより完全な形で働くものと考えなければなるまい。ヴェイユにおける注意は人間における最高の能力であり、自然的世界と超自然的世界とを結び付けながら超自然的世界に深く浸透しているのである。

シモーヌ・ヴェイユは注意に種々の段階を認めているが、注意は大きく二つの種類に分けられている。『前キリスト教的直観』に従えば、「魂の自然的部分と超自然的部分との交差点にある⁽³⁾」知的注意 (attention intellectuelle) と「承諾であり同意であり愛である更に高度のあの注意⁽⁴⁾」とである。前者は半現実しか生じさせないのに対し、後者は完全な現実を与える。『労働の条件』所収の「奴隷的でない労働の第一条件」の説明に従えば、一つは論証的注意 (attention discursive) でありもう一つは直観的注意 (attention intuitive) である⁽⁵⁾。論証的注意とはより下位の推論する注意であり、学校における知的訓練はこの注意を養成することを目的とする。「注意は教育の唯一の目標であるべきだろう⁽⁶⁾」とヴェイユは『ノート』に記している。しかし、この論証的注意は適当な方法で指導されれば最も高度な直観的注意が魂の中に現れるのを準備しうる。知的誠実 (probité intellectuelle) を重視するヴェイユにおいて論証的注意は十分尊重されているけれど、注意に関して真に問題とされるのはこの直観的注意である。論証的注意による直観的注意の準備という主張は短い論文「神への愛のために学校教育を活用することについての省察」に詳しく展開されている。とりわけその冒頭は祈りと注意と学校教育との関係を明瞭に述べている。「祈りは注意から成っている。それは魂に可能な全注意を神に向けることである。」(AD85) 注意の質は祈りの質に大いに関わっている。祈りが強く純粋であって神との接触がなされる時、すべての注意が神に向けられていながら、注意の最高度の部分だけが神と接触する。学校教育は注意の低い部分だけを発達させるけれど、祈りの時用いられる注意の能力を増大させるために有効である、「も

しもこの目的で、この目的でのみ学校教育を実施するならば」(AD85)。さて、直観的注意は超自然的なものに結びついていて創造的であり、「その純粹性における直観的注意は完全に美しい芸術、本当に輝かしく新しい科学上の発見、本当に知恵の方へと進む哲学、本当に救いをもたらす隣人愛の唯一の根源である。そして、この直観的注意こそ、直接に神の方へと向けられると本当の祈りを構成する⁽⁷⁾」。

注意は意志とは関わりがない。意志は魂の自然的部分に属しており、意志の努力は義務を果たすために役立つに過ぎない。意志の適切な訓練は救いに必要な条件ではあろうけれど、それは低く従属的で全く消極的な条件でしかない。魂において意志は何ら良い働きをしない。意志によって果たされるべき義務のない所では、魂はその自然的動きに従うか神に従うか、しかない。魂の自然的動きに従う行為は意志の努力にはよらない。神に服従する行為において人は受動的である。その行為がいかなる苦痛を伴おうと如何に活動的に見えようとそこには「筋肉の努力に似た」(AD190)意志の働きは認められない。「ただ、苦痛と歓喜とを通した待望、注意、沈黙、不動性のみがある。」(AD190)注意は一つの努力、努力のうちの最大のものである。しかしそれは魂の自然的部分とは関わらないものなのである。

ヴェイユにおいて注意への着目は大変早くから行われている。ヴェトの『シモヌ・ヴェイユの宗教形而上学』によれば、ヴェイユは学生時代に既に「知的および精神的力を結合すると彼女に思われた注意の概念⁽⁸⁾」に動かされておりディセルタシオンで注意に言及している。またリセの講義においては「精神の力のすべてとは注意である。我々のものである唯一の能力⁽⁹⁾」という発言もなされている。ヴェイユ自身が語る注意への関心の道筋は「霊的自叙伝」に述べられている。それによれば彼女は十四才の時、後にすぐれた数学者となった兄アンドレの存在も一契機となって、自分の非才故に偉大な人々のみが入りうる真理の王国に近づけないことに絶望した。けれど数カ月の苦悩の後ヴェイユは突然「誰でも、たとえ生来の才能がほとんどなくても、ただ真理を欲し真理に到達するためにいつも注意の努力を行いさえすれば、天才に保留されているあの真理の王国に入るという確信」(AD39)を得る。この確信はずっと続き、ヴェイユの持病の激しい時にも彼女に「注意の努力」を継続させたという。その結果は彼女の予想外の豊かさであった。このように見て来ると「注意」はヴェイユの一生を貫く核であり、彼女の経験によって次第に知的、精神的、宗教的意味を得ていったものと考えられる。ヴェイユにおいて「注意」は、宗教的

領域と非宗教的領域とにまたがる能力であり、恩寵の世界と重力の世界とに接している人間の最高の徳である位置を、獲得している。ヴェイユの道徳というものを語ってみようとするならば我々はそれを注意の道徳と呼びうるかもしれない。

(文中敬称略)

〔註〕

- (1) 原語は *amour implicite de Dieu* で、*amour explicite de Dieu* に対する言葉である。「神への暗黙的な愛」(田辺保)「はっきり意識されない神への愛」(渡辺秀)「神への潜在的な愛」(大木建)と様々に訳されているけれど、ここでは「神への暗黙裡の愛」と訳しておく。

(一)

- (1) 引用文は拙訳による。引用文後の括弧内の AD は *Attente de Dieu* の略号、数字は Simone Weil, *Attente de Dieu*, Fayard, 1969 のページ数である。以下同様。
- (2) *La source grecque*, Gallimard, 1969, p. 18.
- (3) *Cahiers II*, Plon, 1972, p. 27.
- (4) *Intuitions pré-chrétiennes*, La Colombe, 1951. 問題の箇所訳は以下の通りである。「プラトンはこの一節において、力との接触から離れていることだけが正しい、とできるだけ強く断言している。さて、人間の魂の能力で、それが行使されるよう強制するためにも行使されることを妨げるためにも力が触れえない能力は唯一つしか存在しない。それは、善への同意の能力であり、超自然的愛の能力である。それはまた、そこからいかなる種類の凶暴性も出て来えない唯一の能力である。それ故それは人間の魂にある唯一の正義の原理である。類推によって我々は、それはまた神の正義の原理であると考えねばならない。けれど神は完全に正義であるので全くエロスである。」
- (5) 例えば同上書 57 ページ 31 行目から 59 ページ 12 行目まで(特に以下の訳出部分)を参照。「我々は肉的存在であり必然性の内に捕えられているので、我々がその一機関をなしている機構の暴力を、例えば部下に対する指揮者や敵に対する兵士のように、伝えることを厳密な義務によって強制されることもありうる。(中

略) 厳密な義務の領域外では他者に対しても自己に対してもいかなる種類の強制も行使しないこと、そして善のためでさえもいかなる種類の権力も威信も望まないこと、このこともまた服従の徳の一形態である。」

- (6) たとえば論文《La personne et le sacré》では、人間において聖なるものは非人格的なものとされている。cf. *Écrits de Londres*, Gallimard, 1957, p. 16.

(二)

- (1) cf. *Attente de Dieu*, p. 161. 必然性のイメージとの関連で出されている。
(2) *Cahiers II*, p. 29.
(3) *ibid.*, p. 30.
(4) *ibid.*, p. 164.

(三)

- (1) cf. *Attente de Dieu*, p. 43, pp. 48–9.
(2) *Cahiers II*, p. 88.
(3) *La condition ouvrière*, Gallimard, 1966, p. 266.

(四)

- (1) *La condition ouvrière*, Gallimard, 1966, p. 270.
(2) *Simone Weil, philosophe, historienne et mystique*, communications regroupées par Gilbert Kahn, Aubier Montaigne, 1978, p. 276.
(3) *Intuitions pré-chrétiennes*, p. 155.
(4) *ibid.*, p. 155.
(5) cf. *La condition ouvrière*, pp. 269–70.
(6) *Cahiers II*, p. 145.
(7) *La condition ouvrière*, p. 270.
(8) Miklos Vetö, *La métaphysique religieuse de Simone Weil*, Librairie Vrin, 1971, p. 45.
(9) *ibid.*, p. 45.

えのもと ゆりこ